

## # 朝の再会

---

障子の棧を透かして、初夏の朝日がやわらかく褥に差し込んでいた。

古書店『恋綴』の二階、六畳の寝室。昨夜の名残り——むせかえるような雌の匂いが、まだ部屋の空気にどろりと澱んでいる。乱れた布団の上で、二つの裸体が寄り添うように横たわっていた。

先に目を覚ましたのは、頼子だった。

「……ん……」

長いまつげを震わせ、頼子はゆっくりと瞼を持ち上げる。視界に入ったのは、自分の腕の中で安らかな寝息を立てる薫子の寝顔だった。さらさらとした黒髪が白い頬にかかり、薄く開いた唇からは規則正しい吐息がこぼれている。

頼子の紫色の瞳が、とろりと甘く蕩けた。

「……可愛い。可愛いわ、薫子……♡」

起こさぬように、そっと薫子の前髪を指の腹でかきあげる。すると自分の腕、鎖骨、そして——乳房の頂点に、昨夜薫子がつけた無数の紅い痕が目に入った。

「まあ……」

頼子は小さく息を呑み、胸の先端に視線を落とした。ぷっくりと膨らんだ乳首の周りには、薫子の歯型と吸い痕がくっきりと花を描いている。左の乳輪に至っては、赤紫に充血したまま、痛々しいほどに。

「こんなになるまで……薫子ったら、なんて夢中で吸ってくれたのかしら……♡」

頼子はうっとり自分の乳首を指でそっと撫でた。瞬間——

「ひゃっ……♡♡」

昨夜の執拗な愛撫で過敏になっているそこは、触れただけで電流のような快感を頼子の背骨に走らせる。腰の奥がきゅうっと疼き、太腿の内側にぬるりとしたものが伝うのを感じた。

「ああ……まだ、こんなに溢れて……おかしいですわね、私……♡」

頼子はそっと指を下腹部へと這わせる。昨晚も幾度となく薫子の舌と指を受け入れた秘所は、今もなお、しっとりとした湿り気を帯びてひくついていて、陰毛の薄い慎ましい丘を指がかすめ――

「ん……♡ ふふ……やっぱり、まだ疼いておりますの。薫子に、もっといじめてほしくて……」

自分の指を引き抜き、頼子は隣で眠る薫子の寝顔に再び視線を戻した。

薫子の裸体もまた、昨晚の情交の爪痕を生々しく残している。形の良いカップの乳房には頼子が吸い上げた痕がいくつも散り、白い太腿の内側には頼子の唾液が乾いた跡がてらてらと光っていた。そして何より――閉じた大陰唇の隙間から、とろりと漏れ出した蜜が昨夜のシーツに染みを作っている。

「薫子も……寝ている間も、こんなに溢しておいでで……♡♡」

頼子の秘所がきゅんと締まる。彼女はそっと身をかがめ、薫子の耳元に唇を寄せた。

「薫子……朝でございますわよ。起きてくださいませ。それとも――姉が、こうして差し上げましょうか？」

囁きながら、頼子の右手はそっと薫子の乳房の下の膨らみをすくい上げる。

「……ん……ふあ……」

薫子のまぶたがぴくりと震えた。長いまつげの向こうで、紫の瞳がとろんと開く。

「……お姉……ちゃん……？」

寝ぼけた声。まだ夢と現のあわいを漂う薫子は、自分の乳房を包み込む頼子の大きな手の感触に、ぼんやりと首を傾げた。

「おはよう、薫子。よく眠れたかしら？♡」

「おはよう……ございます……って、お姉ちゃん、あの、お手が……」

「あら、嫌かしら？」

頼子はわざととぼけた声で言いながら、指の腹で薫子の乳首をくるりと撫で上げた。

「ひゃんっ……！♡」

薫子の身体が弓なりに跳ねる。寝起きの過敏なそこは、軽く触れられただけで硬く尖り、頼子の指に吸い付くようにぷっくりと膨らんだ。

「お、お姉ちゃ……朝から、その……♡♡」

「朝から？ なにかしら？」

頼子は微笑を浮かべたまま、さらに指を這わせる。薫子の左乳——彼女が最も敏感にしているそこを、人差し指と中指で挟み込み、こりこりと優しく転がした。

「あうっ……！♡♡♡ それは、ずるい、です……お姉ちゃん……っ」

「ずるくなんてありませんわ。だって薫子——」

頼子は一旦手を止め、自分の胸を見下ろすように示した。

「ほら、こちらをご覧になって。貴女が昨晚、こんなに、こんなになるまで吸ってくれた証ですよ？」

「……っ！」

薫子の眠気が一瞬で吹き飛んだ。頼子の豊かな乳房——一個が小玉スイカほどのその頂点には、赤紫色に充血した乳首と、その周囲に散った無数のキスマーク。我に返った薫子は、昨夜の自分の行為をまざまざと思い出し、顔を真っ赤に染めた。

「あわわ……！ 私、そんなに……！ す、すみません、お姉ちゃん、痛かったでしょう……！？」

「うふふ♡ 痛くなんてありませんわ。むしろ——今もこうして、じんじんと疼いておりますの。薫子に愛された証が、まだこんなに熱くて……♡♡」

頼子は薫子の手をとり、自分の左乳房へと導いた。

「触ってみて。貴女が刻んでくれた痕を、姉に教えてくださいまし」

「お姉ちゃ……ん……♡」

薫子の細い指が、おそろおそろ頼子の乳首に触れる。充血したそれはひどく熱く、指先でかすめただけでぴくぴくと震えた。

「熱い……です。こんなに、腫れて……私、なんてことを……♡」

「ふふ、だから今、貴女がちゃんと慰めてくれなければ——私、泣いてしまいますわよ？」

「あ……♡ じゃあ、こう……ですか？」

薫子の舌が、そっと頼子の乳首に這わされた。

「ああっ……！♡♡」

舌のざらつきが過敏な突起をなぞるたび、頼子の喉から甘い声が漏れる。薫子はその反応に勇気づけられ、さらに乳輪ごと口に含み、ちゅうちゅうと音を立てて吸い上げ始めた。

「薫子、薫子……っ♡♡♡ ああ、いい……とてもいいですよ……貴女の口は、なんて優しいのかしら……！」

頼子は薫子の頭を抱え込み、大きな胸をさらに押し付ける。薫子はむにゆりと顔を埋め、夢中で乳首を転がし、吸い、時折歯を立てた。

「ふあ……お姉ちゃんの、お乳……とろけそうに柔らかくて、甘い匂いがして……♡♡ 私、やめられませんか……♡」

「やめなくていいの。もっと……もっとちょうだい、薫子……♡♡」

その間にも、頼子の右手は薫子の身体をまさぐり続けていた。脇腹をなぞり、腰のくびれを撫で、そして——太腿の内側へと滑り込む。

「あ……！♡ お姉ちゃん、指が……！」

「薫子ばかりにさせておけないもの。ほら——こんなに濡らして……もうとろとろですよ？」

頼子の中指が、薫子の濡れそぼった割れ目を上下にゆっくりとなぞり上げる。くちゅ、ぐちゅ……と、蜜の音が静かな寝室に響いた。

「や、やあ……♡♡ それは、昨晚の……まだ残ってて……っ」

「昨晚の？ いいえ、今溢れたものですわ。だってこんなに熱くて、とろりとしていて……まるで出来たての蜜のよう♡」

「お姉ちゃんのいじわる……♡♡♡」

「いじわる？ では——これは？」

くぶん。

頼子の指が、つぷりと薫子の膣口に沈み込んだ。

「ひゃああん……っ！♡♡♡」

薫子の背中が大きくなる。浅い膣内は頼子の長い中指を受け入れ、入り口すぐのGスポットを指先でかすめられて、薫子は視界が真っ白になる感覚に襲われた。

「ここ……かしら？ 昨晚も薫子が一番好きだって仰っていたところ……♡」

「そこ、そこだめ……っ♡♡♡ 朝からそんな、すぐイっちゃ……あああっ！」

ぐちゅぐちゅぐちゅっ！

頼子は容赦なく、指の腹でGスポットをノックし始めた。薫子の膣壁がぎゅうぎゅうと指を締め付け、溢れた蜜が頼子の手のひらをぐっしょりと濡らす。

「は、激し……お姉ちゃ、お姉ちゃあっ♡♡♡」

「イってくださいな。そのまま、姉の指でイって……♡ 貴女の悦ぶ顔、朝一番に見られるなんて、こんなに幸せなことはなくてよ」

「あ、あ、ああああ——っ♡♡♡！！」

薫子の全身ががくがくと痙攣し、膣内が規則的に収縮を繰り返す。頼子の指をぎゅうっと締め付けながら、熱い潮がどぷりと溢れ出た。

「はあ……はあ……♡♡ お姉ちゃん……私、すぐイっちゃいました……♡ 朝なのに、はしたなくて……恥ずかしい……♡」

「なにを仰いますの。可愛い。とても可愛いわ、薫子♡」

頼子は濡れた指をそっと引き抜き、てらてらと光る蜜を自分の舌で舐めとった。

「ん……♡ 薫子の味。私、この味だけで生きていけそうですの」

「あわわ……！ お姉ちゃん、そんなの行儀が悪いです……って、違います、そうじゃなくて！」

薫子は息を整えながら、頼子の身体をぎゅっと見つめた。

「まだ、お姉ちゃん……全然、気持ちよくなってないじゃないですか。私ばかり……♡」

「あら……では、どうしたいの？」

「決まってます。今度は——」

薫子は身体を起こし、頼子の肩をそっと押した。190cmの長身がゆっくりと布団に沈む。薫子は騎乗位のように頼子の腰を跨ぎ、見下ろすように姉の瞳を覗き込んだ。

「香子が、お姉ちゃんを気持ちよくして差し上げます♥」

凜とした声だった。普段の控えめな薫子からは想像もつかない、昨夜の褥で幾度も見せた——開き直った時の、あの強かな顔。

「まあ……♥頼もしいですわね、香子さん♥」

頼子が微笑むと、薫子はそっと身をかがめ、姉の唇に自分のそれを重ねた。

ちゅっ……くちゅ……

「ん……♥」「ふ……♥♥」

舌と舌が絡み合い、唾液が混ざり合う。二人は長く、深く、互いの味を確かめ合うようにキスが続けた。薫子の右手は頼子の乳房を揉みしだき、左手は頼子の秘所へと下りていく。

「……お姉ちゃんも、もう……こんなにぐちよぐちよ♥」

「ああっ♥ 薫子の指が……んん……っ！」

「私の味、舐めてくれたでしょう。今度は私が、お姉ちゃんのを——」

薫子は身をよじり、逆の体勢になった。互いの顔が相手の股ぐらに向かい合う——いわゆるシックスナイン。

「まあ……大胆ですね、薫子♥」

「だって……お姉ちゃんと一緒にイきたいんですもの♥♥」

その言葉を合図に、二人は同時に相手の秘所に顔を埋めた。

「ひゃうっ……♥♥」

「ああっ……♥♥」

薫子の舌が、頼子の割れ目を根元からゆっくりと舐め上げる。頼子もまた、薫子の包皮を舌先で押し分け、露わになったクリトリスを口に含んだ。

じゅるる……っ！

「んんん——っ！♥♥♥」

「くふ……っ、お姉ちゃんの、ぴちゃぴちゃって……♥」

互いの愛液が顎や頬を濡らし、鼻にかかった甘い声が部屋に響く。朝日はすっかり昇り、二人の絡み合う裸体を金色に縁取っていた。

薫子は右手の中指と薬指を頼子の膣内に沈め、左手の親指でアナルを優しく押し広げながら――

「お姉ちゃん。ここも、昨夜たくさん可愛がったところですよね……♡」

「あっ……！♡♡そこ、やあ……っ、薫子、いっぺんに責めないで……♡♡♡」

「いっぺんに、だからいいんです♡お姉ちゃん、昨日教えてくれたじゃないですか……前と後ろ、同時だと、もっと深くイけるって……♡♡」

「そんなこと教えた覚えは――ああああっ！♡♡♡」

ぐぽっ、ぐちゅ、と濡れた音を立てて、薫子の二本の指が頼子の膣とアナルを同時に満たす。薄い隔壁越しに指の動きを感じ、頼子は理性を手放した。

「は、ああっ♡♡♡いい、いいですの薫子お……！奥まで、もっと奥までえ……っ！」

「お姉ちゃん……♡私も、私も……お姉ちゃんの舌が、クリをそんなに吸わないで……あ、あ、あ――っ♡♡♡」

二人は同時に絶頂へと駆け上がっていく。頼子の口内で薫子のクリトリスが激しく脈打ち、薫子の指の中で頼子の膣壁が痙攣する。

「も、もお……イク……っ！♡♡♡」

「私も……っ、一緒に、一緒ですう……！♡♡♡」

びゅっ……どぶぶっ……！

二人の身体が同時に大きく跳ね、互いの顔にかかるほどの潮が噴き出した。頼子の口の中に薫子の蜜が溢れ、薫子の頬に頼子の潮がかかる。二人はそのまま力尽き、ぐったりと布団に倒れ込んだ。

「はあ……はあ……♡♡」

「ふ……ふふ……♡」

荒い息を繰り返しながら、二人は顔を見合わせた。互いの顔は相手の蜜でぐちゃぐちゃに濡れている。

「薫子の顔……すごいことになってますわよ♥」

「お姉ちゃんだって……ほら、鼻の頭に私のがついて……♥♥」

「あら、本当。……ん♥」

頼子は薫子の顔に手を伸ばし、鼻先の蜜を指ですくって舐めとった。それから、薫子の顎に伝う自分の潮も、そっと指でぬぐって口に運ぶ。

「……私のと、薫子のが混ざり合って……変な味ですわね♥」

「でも、嫌じゃない味、でしょう……？♥」

「ええ。この世のどんな高級な甘味よりも——私にはご馳走ですの♥♥」

二人はくすくすと笑い合い、汗と愛液にまみれた身体を寄せ合った。

窓の外からは、小鳥のさえずりと、遠くを走る車の音が聞こえる。もうすぐ開店準備をしなければ——そう思いながらも、二人は動けなかった。

「……お姉ちゃん」

「なあに、薫子♥」

「今日、お店……臨時休業にしませんか？ その、もっと……お姉ちゃんと一緒に……」

薫子は頬を染め、頼子の豊かな胸の谷間に顔を埋めた。

「……うふふ♥ 薫子、貴女は本当に……姉を蕩かすのが上手でいらっしやる♥♥ いいですわ。今日は一日——」

頼子は薫子の顎をそっと持ち上げ、再び唇を重ねた。

「——お店はお休み。誰にも邪魔させません。今日こそ貴女を、夜まで離しませんからね♥♥♥」

「……はい♥♥♥」

こうして古書店『恋綴』の暖簾は、その日とうとう下りないまま——二階の寝室では、朝日が昼の光に変わるまで、むせかえるような雌の匂いがさらに濃く、深く、積み重なっていくのであった。

(了)